

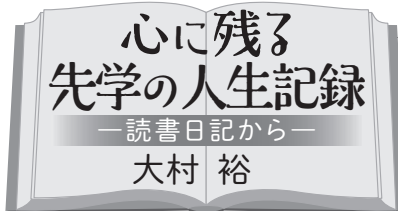
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.191  
2019.8.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第11回

## 田中美知太郎『時代と私』

(文藝春秋 1984年)

標記の文献は、「縄文学の父」・山内清男博士と幼馴染の間柄であった、ギリシャ哲学の泰斗・田中美知太郎博士(1902~1985年)の自伝である。

田中美知太郎と山内清男の関係については、かつて佐原眞により紹介されており(「山内清男論」『縄文文化の研究 10』雄山閣 1984年)、どんな学者だったのか気にかかっていたところであった。先年、神田の古本市を当てもなく見て回っていたところ、偶々この本がたった300円で露天の棚に置いてあるのを発見し、狂喜したものであった。

田中美知太郎は、山内清男と同年、しかも一日違いでこの世に生を受けている。「山内清男と私」(『田中美知太郎全集 13巻』筑摩書房 1970年)によると、山内とは早稲田小学校時代の友だちで、一緒に本を読んだり、おしゃべりをしたり、喧嘩をしたりした、とある。別のエッセイでは、山内と自分の家が近所であったこともあり、一日のうちに何度も互いの家を往來していたので、それを見た家の者に笑われたり、からかわれたりしたと書いている(「交友録から」同上文献所載)。よほどウマが合ったのであろう。今回紹介する自伝でも、山内との交流についての回想が断片的に書かれている。小学校卒業後、二人は別々の中学校に在籍することとなったが、その後も連れだって社会運動に首をつっこんだり(大杉栄らの「北風会」や「新人会」と接触、メーデーのデモにも参加)、読書会でマルクスやクロポトキン、レーニンなどの英訳本を読んだりしていたという。「資本論」とか「国家と革命」については、英訳本と独訳本で二回読んだというからまことに恐れ入る次第である。ちなみに「読書会」と言っても堅苦しいものではなく、「誰かが訳をつけてみて行き詰まったり、間違ったりすると、他の誰かがすぐそれを取り上げて、正しい訳をして、今度はそれを読みついで行くといふやり方で」「スポーツの面白さがあった」。「畳の上でござ寝」しながら、「マルクスの文章でも何でも、無遠慮に批評したり、笑ったりしたので何となく愉快であった」と回想している。やっつけて楽しく、自然に語学力もつくのだから、長続きしたことだろう。なお、本書に読書会メンバーの記録はないが、ここでの山内の言動を、佐原が田中から聞き取って紹介している(佐原1984)。

山内との交流に関する回想は、このほか、大杉栄や詩人の有本芳水の所など著名人を求めて方々訪ねて歩いたということ、自分が京都帝大の選科に進んだのは、山内が東京帝大の人類学教室に選科生として進学したのを見て、「直接自分の学びたいと思ふものだけを学ぶといふコース」があることを知ったことがその理由であったこと、自分は丘浅次郎の『進化論講話』を読んだことがきっかけで進化論に関心を深めたが、山内も同様の関心を持っており、「生物学から動物学、そして人類学といふようやうに専門を限定して行って、日本先史時代の研究で画期的な仕事」をしたこと等が記されている。

田中は、自分の生い立ちについてあまり多くを語っていない。わずかに「母一人子一人の貧しい生活」をしていたということのみであり、父親や親戚に関係する記事も見当たらない。職場の話や勉学の話は山ほど出てくる。自分の人生の折々に発生した大事件(関東大震災、二・二六事件、十五年戦争、欧州大戦など)や時の政治家、および身の回りの学者たちの評価(西田幾多郎・三木清・河上肇など)についても、かなり鋭く興味深い洞察が加えられている。しかし、この限られた紙面でそれらを詳述するのは不可能であるから、私が本書で特に感服したことのみを紹介しておこう。それはもちろん彼の勉学の遍歴についてである。

まず中学時代には、自分のしたい学問だけやりたいと考え、国語・漢文・数学・物理などはほとんど勉強せず、図書館に通って邦訳の『プラトン全集』を全巻読破したという。中学卒業後は一時ドイツ語学校の夜学に通い、その後上智大学予科一学年の二学期に編入。ここを経て上智大学本科に進学するも、ギリシャ語の授業がなく、哲学の講義内容にも失望したため退学し、京都帝大文学部哲学科の選科に入りなおしている。なお、京都帝大入学前の日記によると(20歳の頃)、カント、ベルグソン、ヘーゲル、ミル、フッサール、デカルトなどの原書(独文・英文)を読む日々を送っていたという。驚くべき早熟ぶりである。京都帝大入学後は、ギリシャ語の講義は熱心に受講したようだが(担当教師のギリシャ語の実力が怪しいので、間違いを見張りながら受講)、西田幾多郎や波多野精一らの西洋哲学の講義は面白くないので出席することをやめてしまう。では、学校に行かないで何をしていたのかというと、ギリシャ語でプラトンを読むことに多くの時間が捧げられ、その他の時間はドイツやイギリスの書物を読むことに向けられたという。そして気の向いたときに諸先生の家を訪問している。おそらく独習していて分からなかったところの教示を仰ぎに行ったのだろう。受け身ではなく、主体的に、問題意識を持って日々の勉学に励んでいたのであった。

選科修了後は二年間定職についていないが、プラトンの「テアイテトス」をギリシャ語から翻訳する約束で月々80円を岩波書店からもらっている。この後、大学の先輩の三木清の引きで法政大学の非常勤講師に就任。戦後京都大学に招聘されるまでここを拠点にして、東京文理科大学や東京商科大学などの講師も兼任している。この他東京帝大の学生たちから懇願されてギリシャ語の講義を私的に行っていたようだ。しかし、抜群の実力があがりながら、なかなか専任の職を得ることが出来なかった。その辺は山内清男とよく似た境遇を経てきた人物と言うことが出来る。また束縛を嫌い、確固とした自身の視点を持ち、権威に盲従しないという気性もよく似ている。双子のようによく似た人格で、同等の学歴を持ち、能力も業績も甲乙つけがたい二人の間に、「世俗」の評価において、戦後大きな格差が生まれた(田中は数々の栄誉を国や京都市から受けている)のは、実に残念なことであった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第11回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第184回) 石貫弘泰 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第8回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「東アジアと百済土器」 野田優人 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第8回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 8. チャード博士と考古学関係の訳語集

エジプトから戻った翌年の1964年から息子は幼稚園にかよいはじめたので、私もトロント大学の非常勤教員として、文化人類学の授業を担当することになった。講義の準備に追われながら、スペインで出版されたアベ・ブレユ記念論文集に所収された芹沢長介・中川久夫両氏共著の草水台に関する報告の英訳を引き受けたり、1964年3月にオンタリオ州ハミルトンで開かれたアメリカ東北部人類学会の年次大会で、日本の先土器文化から縄文文化への推移に関する発表をしたり、その年の11月にデトロイトで開催されるアメリカ人類学会の年次大会で同様のことを「日本における中石器的現象」と題して発表する準備をしたりしてかなり忙しく暮らしていた。そのころ、前にも触れたウィスコンシン大学のチェスター・チャード博士から私の夫、フィリップ宛てにお便りがあって、おたくの奥さんが日本の先史時代にとり組んでいられるということを知りましたとのこと。日本国外で日本の考古学に関する情報を発信しているのは彼女と私たちのグループだけでしょうから、数年前に「先土器文化の概要」についておなじような論文をほとんど同時に出版した時のような重複をして貴重な時間と労力を無駄にしないように致しましょうとのこと趣旨だった。

私からの返事に、ハミルトンとデトロイトでの学会をめざして上記のような研究発表を用意していること、そしてCOWA(Council of World Archaeology世界考古学協議会)という機関の出している考古学文献集の日本関係の部分を担当していただける国際キリスト教大学のキダー博士のお手伝いをして先土器文化に関する主要文献の解説付き英訳などをおこなっていることとお知らせした。これを読まれたチャード博士から「私どもの研究題目の選択には何かか憑いているようだ」に始まるご返事をいただいた。というのは、チャード博士自身、土器の始まりに関する報告をモスクワでの学会で報告してきたばかり、そして先土器文化の文献集を岡田淳子・岡田宏明両氏等と準備中なので、数年前の先土器文化の概観にはじまった重複(No.183, 第4回で言及)がまたしてもくりかえされているということになった。私も驚いたけれども、言ってみれば日本考古学に関する数少ない発信地が、どちらも当時点での重要な問題に着目しているということかと思われた。

ハミルトンで発表された報告の原稿はぜひ読ませていただきたい、できればウィスコンシン大学出版局から出している*Arctic Anthropology*に掲載させていただきたいとお申し越す。その一方、モスクワでの口頭報告は印刷にさきだって推敲しているところなので、コメントを頂きたいとのこととで原稿の交換となった。読み比べてみると、山内・佐藤両氏のシベリアと日本の縄文草創期の対比(No.187, 第6回で触れた)に関する批判などについて意見は一致するが、この前の「先土器文化の概要」の場合と同じく、考古学関係の地名の記載、述語の訳し方の違いが目についた。地名の場合は「井島遺跡」のことをIjimaと書いてあってもIshimalになっていても、「井島」という漢字が頭にある人には問題ないが、漢字を知らない読者はイジマの他にイシマという遺跡があると思うだろう。いずれにしても地名については土地の人に尋ねればすぐ解決するが、考古学用語に関しては内容を正しく伝えながら述語として使いやすいような訳語を作る必要がある。特にむづかしいのは土器表面の裝飾手法に関する言葉だ。たとえば「爪型文土器」。ネイル・インプレスト・ポタリー(nail-impressed pottery)と訳されている場合が多いが、実際の作業に使ったのは爪ではなくて割竹の切口だとされている。それなら「爪型」を直訳してネイル・パターン・インプレスト・ポタリ(nail-pattern impressed pottery)にしてもよいわけだが、長たらく

て語呂がよくない。チャード博士とも相談した結果、1964年の*Arctic Anthropology* 2巻2号に所収された拙文では「爪型文」をそのまま tsumegata-mon とローマ字で表記して、割竹の切口、云々の説明を脚注でつけることにした。「捺糸文」と「押型文」も同様の取り扱いをしている。



▲Chester S. Chard博士  
(1915-2002)

これら早期の土器より古い層から出土する土器については問題はなお複雑になる。まず第一に、新しく登場した土器なので、日本語の名称が調整されておらず、隆帯文、細隆文、隆起線文、細隆起線文、微隆起線文など幾通りかの名称が使われていること。このうち、福井洞穴の細隆文土器と隆帯文土器は別の層位から出土すると報告されているので、土器の違いを区別した名称であることが明らかだが、異なった名称が同模様の土器を指しているらしい場合(例えば福井洞窟II層の細隆文土器と上黒岩IX層の細隆起線文土器)もある。加えて、土器の表面に“隆起”した“線”を作り出した方法について、細い粘土の紐を貼り付けたとする説と土器の表面が柔らかいうちにつまみあげて隆起線を作ったとする考えがあったようだ。多様な訳語のうち、“Applique ware”、“applique design”、“Band-applique”、“Linear-applique pottery”などは前者の貼付け説を反映しており、“raised ribbon ornamentation”、“raised-band decoration”は後者に傾いている。このほか単に叙述的な“linear relief ware”などもあって様々な訳語が氾濫しはじめていた。私自身、ハミルトンでの口頭報告の早稿では“applique ware”と書いていたところ、*Asian Perspectives*に出た八幡一郎先生の論文で“raised ribbon ornament”という言葉が使われているのをみて発表の時はそれに追従したが、1964年の*Arctic Anthropology*に印刷された原稿では“linear relief decoration”に変更している。隆起線文系統の土器は、当時としては日本最古、おそらく世界でも最古の土器形式ということだったから、その歴史的重要性も考慮して混乱を導入しないようにしなければということをおもってチャード博士も私も意識していた。この他にも石刃、ナイフ形石器、細石刃の定義、特に幾何形細石器(geometric microliths)という言葉の使い方などについていろいろ議論があったので、1964年11月のアメリカ人類学会の年次大会出席のため私ども一同デトロイトに来る際に話し合いの場所を設けようということになった。「日本考古学関係の訳語に関するカンファレンス」というと大袈裟だが、デトロイトに近いミシガン大学の日本研究所のセミナー室に集まったのはチャード博士と私のほかに、当時ミシガン大学の客員准教授をしていたハルミ・ベフ博士、そしてウィスコンシン大学に研究員として留学中の岡田淳子、宏明ご夫妻、チャード博士の研究助手をしていられた大貫恵美子、小谷凱宣、Richard Morlan諸氏たちだった。大貫恵美子氏はのちにウィスコンシン大学教授、Emiko Ohnuki-Tierney博士として多くの業績を残された方だが、このころは当大学の院生で、私どもの論議をテープレコーダーから起こして訳語集の草案をつくってくださった。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ロードクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在:ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ロードクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。今回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## U レーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 184

にやこにやいせき  
新谷古新谷遺跡

～愛媛県今治市～

石貴 弘泰

新谷古新谷遺跡は、愛媛県の今治平野の二大河川である蒼社川と頓田川の間に広がる五十嵐丘陵に所在します。遺跡は、丘陵部がヤツデ状に伸び、その間の谷部が形成された地形環境に立地します(図1-1)。一般国道196号今治道路建設に伴い、平成27年度より調査を開始し、令和元年度も継続調査中です。本題に入る前に、私が(公財)愛媛県埋文センターに奉職し、携わったその他の遺跡について紹介します。私は平成25年度から職員となり、初年度と2年目は新谷森ノ前遺跡(図1-3)の調査を行い、3年目から新谷古新谷遺跡と新谷赤田遺跡(図1-2)の調査を行いました。足掛け6年に渡り谷・丘・谷・丘…と調査を進めてきました。新谷森ノ前遺跡は縄文時代から古代までの複合遺跡で、弥生時代は中期末から後期にかけての集落が営まれていました。丘陵部では中期末の土器を含む竪穴建物跡から鍛冶炉を伴う竪穴建物(7区SI07)を検出し、建物内からは鍛冶に伴うとされる小鉄片や多量のガラス小玉が出土しました。新谷赤田遺跡は弥生時代中期末から後期、古墳時代後期を中心とした遺跡で、弥生時代の遺構では、新谷森ノ前遺跡と同じく鍛冶炉を伴う竪穴建物が4基(SI04、SI06、SI33、SI34)検出されました。新谷赤田遺跡でも竪穴建物からガラス小玉が出土しています。

さて、本題の新谷古新谷遺跡は、縄文時代後期から中世までの複合遺跡で、特に弥生時代後期と古墳時代後期の遺構密度が高く、これら二時期は今治平野の中でも中心的な集落の一つとして営まれていたようです。新谷古新谷遺跡の特徴として、微高地(1～4区)や丘陵部(5区・7区)には居住域が形成され、谷部(3区・4区・6区)には多量の土器や木製品が廃棄されている事が挙げられます。1～4区は遺跡の中で一番面積の広い微高地です。遺構の検出状況からは弥生時代後期後半と古墳時代後期が中心と言えます。中でも弥生時代後期後半はより遺構密度が高いということがわかりました。平成28年度の調査では、新谷森ノ前遺跡・新谷赤田遺跡に続き、鍛冶炉を伴う竪穴建物を検出しました。また、10基の竪穴建物内からガラス小玉の出土がみられました。これも、新谷森ノ前遺跡、新谷赤田遺跡に続く事例となりました。また、この丘陵部の中央を流れる溝から多量の土器が出土し、溝の機能が終了する際に、多量の土器が廃



1: 新谷古新谷遺跡 2: 新谷赤田遺跡 3: 新谷森ノ前遺跡  
※調査区内の大きな地形 { 〇〇…微高地・丘陵 〇〇…谷部 }

▲図1 新谷古新谷遺跡の位置

棄された様子が伺えました。また、この溝には丘陵内の各竪穴建物から伸びる排水溝が接続しており、丘陵全体の排水口としての役割を果たしていたようです。静岡県浜松市の坊ヶ跡遺跡にも同様の事例があり、溝の機能を考える上で貴重な事例となりました。

谷部では特に注目されるのが4区の谷部です。古代から弥生時代前期末までの遺物が多量に出土しました。昨年度末には「凡直」と線刻された須恵器が出土し、今治平野における古代社会を考える上で貴重な発見となりました。平成29年度の調査では、古墳時代後期の層位で県内初出土の「琴」などの楽器類、刀形の木製品、下駄、農耕具、紡績具、建築部材など2,000点近くの木製品が出土しました。琴は全長180cm弱の大きなもので、残存状況も良いものです。また、子持勾玉も2点出土し、愛媛県内の子持勾玉の出土事例は8遺跡9点になりました。弥生時代後期の層位では、多量の廃棄土器が出土しました。そのうちのひとつである、土器のプローションは愛媛県内で多く出土する在地系の複合口縁壺にも驚かされました。この複合口縁壺の口縁部には、波状文が鋸歯文が描かれることが多いのですが、新谷古新谷遺跡のものには、なんと「弧帯文」と「人物画」描かれていたのです。もちろん県内初の事例ですし、他の地域にも類似



▲「弧帯文」が描かれた複合口縁壺  
提供:(公財)愛媛県埋蔵文化財センター

はありません。弧帯文の研究をされている方々に実見していただいたところ、岡山県総社市に所在する榑築弥生墳丘墓の弧帯文石に非常によく似た文様構成であるということがわかりました。榑築弥生墳丘墓では完形の弧帯文石と発掘調査で出土した弧帯文石の二つがあるのですが、新谷古新谷遺跡でも、弧帯文が描かれた複合口縁壺の口縁部が見つかっており、二個体分があったことがわかっています。出土した複合口縁壺の所属する時期は、榑築弥生墳丘墓の築造時期よりも新しいようです。

近年、私ども(公財)愛媛県埋蔵文化財センターの調査では、「県内初」の事例が相次ぎ、担当した調査員はそれぞれが目的を持ち調査を行っております。たとえば、私は新谷赤田遺跡と新谷古新谷遺跡の検出したほとんどの竪穴建物の埋土を水洗選別し、ガラス小玉が出る竪穴建物と出ない竪穴建物の違いや、出土量の違いなどから、建物の廃絶に関わる儀礼行為の可能性や時期的な傾向などがわかってきています。また、別の調査員は出土した木製品の中で、琴に着目し、新谷古新谷遺跡で出土した琴の構造解明などを行っています。「弧帯文」が描かれた土器についても、土器編年上の位置付けなど、課題はたくさんあります。発掘調査で得られた情報をもとに当時の社会の復元をおこなおうと、職場全体が熱気に包まれている状態です。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは小野準弥さんです。

## 考古学者の書棚

## 「東アジアと百済土器」

土田純子／同成社(2017)

野田 優人

2019年の現在、日韓関係は、戦後最悪の状況と言われているが、古代から日本と朝鮮半島との交流は盛んであり、とくに百済とは良好的な関係であった。奈良県石上神宮に伝来されている七支刀、百済の王である武寧王の古墳の石室から日本原産の高野槨の棺が見つかるなど、当時の交流を示す資料は枚挙にいとまがない。さらに近年、韓国では発掘調査数が増加し、さまざまな地域との交流を示す新たな発見もみつかっており、当時の歴史像を復元するのに考古資料の重要性は日々増している。

考古資料のなかでも土器は、他の資料とはことなり、圧倒的な数量と普遍性を有しており、その重要度は高い。ただし、数量と普遍性を持つ土器から、歴史像を復元するには、時期や地域の整理といった基礎研究なくしては成り立たない。本書はまさに、その基礎研究が細かく、最新なものである。構成は以下のとおりになっている。

## 序章

- 1章 百済土器編年研究の目的と方法
- 2章 百済土器編年研究の現況と問題点
- 3章 百済土器の主要年代決定資料
- 4章 百済土器の成立と展開
- 5章 考古資料から見た漢城期百済の領域拡大過程
- 終章 本書の総括と百済土器編年の意義

序章から順序よく読むのもいいが、私は、3章と4章を入れ替えて読むことを勧める。まずは序章、1、2、4章で百済土器の変化の流れを確認したうえで、年代比定の根拠となる3章を読むとわかりやすいのではないと思う。実は、引用文献を除く、全363ページ中176ページをこの3章にあてている。いかに、筆者がこの章に力をいれているかがわかる。

序章、1章では、本書を読むにあたり、百済についての基礎知識の説明と方法論についてまとめられている。百済は漢城(現在のソウル)に都を構えたが、475年に高句麗により都が陥落したことで、幾度か都を移すとともに、南方へ領域を広げていく。また土器の種類には、日本でも見られる、壺、甕、高坏、蓋坏はもちろん、百済特有の三足器などもみられ、図をもとに詳細に述べられている。百済についての知識がなくとも、序章、1章を読めば、百済についての基礎知識を得ることができる。

2章では、これまでの百済土器における研究史と問題点をまとめている。研究史は時系列にまとめられているため、どのような過程を経て現在に至っているのかわかりやすい。また、ここではいくつかある問題点のなかでも、土器の年代を示す根拠について特に問題があると説く。百済土器自体に年代が記載されていないため、共伴する遺物が年代推定の糸口となる。これまで、中国から伝わった陶磁器が百済土器の年代推定に主に使われていた。なぜなら、中国では年代が記載されている墓誌とともに陶磁器が出土する例が多く、ある程度の年代を推定しやすいためである。百済では完形、破片に関わらず約330点の中国陶磁器が見つかり、百済土器の年代推定に活用さ

れている。しかし、中国陶磁器は伝世している可能性があり、中国の墓誌で記されている年代をそのまま百済土器の年代に採用できないのではないかという意見があると紹介する。

4章では、各器種を検討し編年を組み立てている。ここでは、壺や高坏、三足器、蓋坏、碗などを対象として、各部位の形態と、口径や土器の高さといった数値を使用している。そして、時期差が反映されていると判断したものを組み合わせ、分析の最小単位である型式を設定し、相対的な変化について記述している。つまり、「この土器の形や大きさは、あの土器の形や大きさより古い、新しい」といったことである。

3章は、4章で明らかにした土器の変化に年代を比定する。つまり、「この土器の形や大きさは、おおよそ〇世紀前半だ」といったことである。年代を推定する資料としては、中国陶磁器、新羅、伽耶、日本の土器、さらには馬具、鉄鏃に注目し、百済土器と共伴している例を挙げている。これら多くの共伴する遺物から、百済から出土した中国陶磁器は、伝世しておらず、年代推定の資料として活用できるとする。さらに、新羅、伽耶、日本から出土した百済土器も取り上げ、年代比定に齟齬がないかの検証をおこなうなど、土器の年代決定には慎重かつ徹底している。私も研究をするうえで、最も大変なのは、検討する資料を探すことであるとする。毎年、数多くの報告書が刊行され、その中から目当ての土器を探すのは大変な労力がかかるが、それが他国の資料を収集するとなれば、その労力は想像を絶する。筆者の労苦に感服する。

5章では、検討してきた百済土器編年をもとに、百済の領域拡大についてまとめられている。百済は南方に位置する馬韓地域に対し、領域拡大をおこなう。それは、文献史料からも指摘されているが、本書では、百済土器と、冠、飾履、鏃斗、陶磁器といった遺物以外に、山城、墓制にも注目し、考古学的な側面からアプローチをおこなう。それらの様相から、「直接支配」、「緩い間接支配」、「強い間接支配」といった支配様相を推定する。

本書の実証的かつ詳細な百済土器編年の研究は今後、さまざまな研究で応用されていくだろう。本書でも応用研究として、百済の領域拡大について論じられており、この先、東アジアをも包括した歴史像の復元研究へと昇華される可能性を秘めている。3章で明らかにしたように、百済内には、さまざまな地域の土器が出土し、また朝鮮半島の他地域でも百済土器が出土している。各地域特有の土器と百済の土器が共伴したことにより、交流の様相が明らかになる。ここから土器を通じた東アジアの交流を実証的に描ける段階に差し掛かりつつあることがわかる。そういった点で本書の意義は大変大きく、日本人の私たちにも必読の一書といえるのではないかな。今後の朝鮮半島での研究動向に目が離せない。

## アルカ通信 No.191

発行日 2019年8月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp